

P-189

当院健診センターにおける胃内視鏡二次検査の状況
仙台赤十字病院 健診センター

志賀 清子、佐藤 清美、鈴木 道子、佐藤 郁子、
永井恵理子、進藤 真実、山下 和良

【はじめに】健診の大きな目的の一つは疾病の早期発見である。その役割を果たすには、二次検査（D2）判定となった受診者への再検査を積極的に呼びかけることが大切である。今回、D2の判定率が一番高い上部消化管検査について検討した。

【現状】当院の上部消化管検査は基本的に胃X線検査を実施し、結果は消化器内科の専門医が判定を行っている。D2になった受診者には結果を送付する際に胃内視鏡検査の予約案内を同封している。

【成績】平成22年度において人間ドック・生活習慣病健診を実施した2,250名中、胃X線検査の実施数は884名である。この中でポリプ疑い、壁肥厚、変形などの診断で二次検査が必要となった受診者は595名で、当院で内視鏡検査が出来たのは255名、内訳は男性166名、女性89名であった。組織検査を実施した受診者数は男性34名、女性6名であった。そのうち胃がんと診断した受診者は胃X線検査を施行した884名中1名（0.1%）で、当院での健診は初めてであった。平成20年度の胃がん発見数は1例、平成21年度は4例であった。そのうち当院での健診を初めて受けた受診者は2名であった。

【結論】平成22年度二次検査の内視鏡検査の受診状況が43%と低かった。そのことは検査予約や案内だけでは不十分だったことや受診後の二次検査の追跡調査までは出来なかったこともある。当院はリピート健診者が多い。健診を実施していく中、初診者には次年度も引続き健診を受けてもらえるような体制作りが大切である。疾病の早期発見並びに予防のために、健診者の支援と追跡調査を十分に行うことが大切であることを再認識した。このことを肝に銘じ今後の健診業務に生かしていきたい。

P-191

当院におけるデジタル保管画像のセーフティマネージメント

日本赤十字社長崎原爆諫早病院 放射線科

大町 繁美、壁村 早苗、松本 祐二、小楠 弘幸、
吉田伸太郎

【はじめに】当院では2010年2月よりCT画像閲覧システム運用により各部署にてモニター閲覧ができるようになった。また今まで院外紹介、結核審査会、病診連などCTフィルム貸し出しは袋ごと貸し出していたが、デジタル保管画像はCD-Rへの焼き付けとなった。今回、CT画像閲覧システム運用、デジタル画像の保管、管理、CD-R作成管理など当院に適したセーフティマネージメントが必要になり、当院に適した方法で検討しデジタル保管画像のセーフティマネージメントを構築したので報告する。

【結果】CT画像閲覧システム運用により各部署にてリアルタイムでCT画像がモニター閲覧ができるようになり、患者さんの待ち時間の短縮に繋がり、フィルムの各部署への移動トラブルも解消され、フィルムの紛失、画像の劣化などのトラブルが防げた。またデジタル保管画像のCD-R焼き付け件数が増え、確認事項のチェック、CD作成管理などの業務も増加したが、CD作成依頼票にCD作成必要優先順位の欄を設け至急作成に対応している。

【考察】当院に適したデジタル保管画像のセーフティマネージメントをすることにより、情報の共有化におけるインシデント・アクシデントもなく、運用も順調で、トラブルの発生も少なくなった。

P-190

医用モニタの輝度と使用時間に対する初期評価

神戸赤十字病院 放射線科部

辻居 賢一、松村 光章、新井 純一、齋藤 優子、
山崎 幸恵、野山 恭旦、浅妻 厚、古東 正宜

【背景・目的】当院は2003年8月の開院以降、フィルムレス運用に伴い医用モニタ（以下、モニタ）の品質管理を定期的に行い、安定したモニタ表示の維持に努めてきた。また、2010年7月より電子カルテの導入に伴い、109台のモニタが院内に配備され、それらを効率よく効果的に品質管理していくことは必要不可欠である。

今回我々は、電子カルテ導入から約1年経過におけるモニタ輝度に対する初期評価を行うとともに、特定のアプリケーションと連動するBacklight Saver機能（以下、ソフト）の導入を試み有用な結果が得られたので報告する。

【対象機器】モニタ（EIZO RadiForce）：5Mモノクロ1台・3Mモノクロ18台 2Mカラー4台・1Mカラー86台

【方法】院内に配備されたモニタ109台に対し、『医用画像表示用モニタの品質管理に関するガイドライン』（JESRA X-0093・A-2010）に基づき、RadiCS（モニタ品質管理ソフトウェア）を用いて不変性試験を行った。得られたデータをもとに、受け入れ時のデータと比較し、各モニタの最大輝度の経時変化とソフトの導入前後でのモニタ使用時間について比較検討を行った。

【結果】各モニタの輝度偏差は、経時的な測定では安定した値が得られたが、設置時と比較すると、約10%変動するモニタが認められた。また、モニタ使用時間については、設置箇所により大きく変動していた。ソフトの導入前後で大幅な使用時間軽減が認められた。

【結語】モニタ輝度の初期評価は、モニタ個体の特性を把握することが可能であり、定期的な品質管理を行う上で有用である。また、ソフトの設定を行うことで、使用時間の大幅な軽減が認められ、不必要なモニタ劣化を防ぐことが可能である。

P-192

異なる2機種のマノグラフィ装置におけるポジショニングの比較検討

松山赤十字病院 中央放射線室

高橋なつみ、水谷 宏、水口 司、富永 亨、
西田 史生

当院では2010年5月にマノグラフィ装置AMULET（FPD）【FUJIFILM MEDICAL】を導入した。以前使用していたSenographe DMR（CR）【GE】と比較すると、撮影台やアームなど装置の形状が若干変化し、ポジショニングにも変化が見られるように感じられた。

そこで今回、現在の装置におけるポジショニングの問題点を明確にし、更なる向上につなげることを目的に、装置が変わることによりマノグラフィ画像にどのような影響を与えたのか、比較検討を行ったので報告する。

なお比較の方法については、AMULET導入前と導入後に撮影された同一者のマノグラフィ画像を無作為に抽出し、主観的評価によって比較を行った。評価基準はマノグラフィ健診精度管理中央委員会のポジショニング評価基準を参考に独自の基準を作成し、左右の対称性、乳頭の側面性、大胸筋、乳腺後隙、乳房下部、乳腺組織の伸展性の各項目について5段階評価により点数付けを行った。